

リスクから考える運用



- リスクとは「振れ幅」のこと
- 「確実に儲かる」金融商品はない
- どこまでのマイナスを許容できるか、が運用のスタート

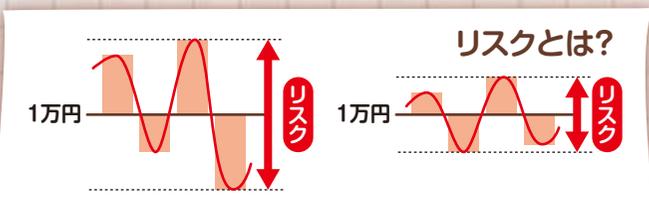
リスクとは？

運用において、よく耳にする「リスク」という言葉。日本語に直訳すると「危険」ですので、マイナスに振れる可能性だけを指すように思いがちですね。投資・運用で「リスク」という場合には、プラスとマイナス、両方に振れる「振れ幅」のことを指します。ブランコを漕いでいる時、前方へ高くまで上がったブランコは、後ろ側にも同じだけ高く上がります。金融商品もブランコと同様に、大きく儲かる可能性が高い商品は、大きく損をする可能性も高いのです。これが「高リスク」の意味です。

確実に儲かる商品はない

一般的には、「ハイリスク・ハイリターンの商品」「ローリスク・ローリターンの商品」という表現を使うことが多いので、「ローリスクでハイリターンを見込める商品があるのでは？」と考えがちです。でも、ブランコの動きを思い浮かべてみるとわかるように、片方にだけ高く上がって、もう一方へは低くしか上がらない商品はありません。

詐欺などの手口としてよく紹介されるのが「確実に儲かる」という常套句。運用において、「確実に」ということはあり得ません。だからこそ、起こり得る可能性を検討し、どこまでならマイナスを許容できるかを考えながら、運用を行うようにしましょう。



リスクとは価格の変動幅のことです。変動幅が大きい(左)時に「リスクが大きい」と言います



運用は必要？

右頁上段グラフのように、年2%の物価上昇が続くと、資産価値は10年後には約82%、30年後には約55%にまで減少します。現時点で3,000万円の資産が、10年後には約2,460万、30年後には約1650万円の価値にまで下がってしまうのです。ところが、1%の運用益があれば、減少率はその半分に抑えられます。高度経済成長時代のように預金の金利が高かった時は運用を考える必要はありませんでした。また、物価上昇率と同じだけ年金額も増額される環境であれば、少なくとも前年と同じ生活水準を保つことができます。でも超低金利下、しかも年金の支給に抑制がかけられている環境下にあっては、お金の寿命を長引かせるために、運用は検討したい材料の1つです。

とは言え、心配性の人が、マイナスに振れる可能性もある投資の世界に足を踏み入れてしまったがゆえに、心休まる時がなくなるようでは、せつかくの老後が台無しです。また、インフレが起こっても心配不要と思えるだけの資産がすでにいる人が、敢えて資産運用を行う必要性もありません。個々の事情を踏まえて、一人ひとりが考えるしかないのが、お金の世界です。「私にとって、どの道をいくのがいいのか」、正解は一つだけ、というわけではありません。

金融商品を知ろう

マイナス金利の恩恵を受けにくいシニア世代。
「預金だけでなく運用も必要かな?」「でも運用のイロハも知らないし...」。
そんなマネー初心者のための、金融商品の基礎知識編です。

※本原稿(2016年9月末日時点)は、一般的な傾向を解説しており、投資判断を断定したり促すものではありません。

預金が目減りするインフレリスク

10,000円の物はいくらになる?
100万円の資産価値はどうなる?



2%のインフレが
30年続くと資産価値は
半減するのね...

毎年2%のインフレで資産価値はどう変わる?

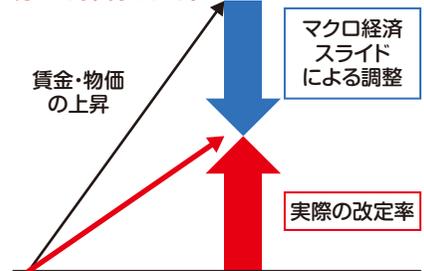


年金生活者はダブルでリスク

平成16年に導入された「マクロ経済スライド」で、物価上昇時に年金はスライド調整率分、マイナスされるため預貯金の資産価値が減るだけでなく、年金も目減りすることになります。

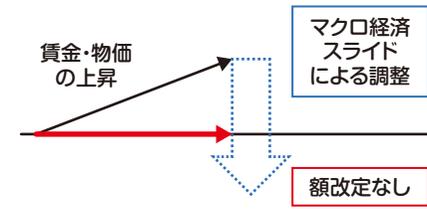
賃金・物価の上昇率が大きい場合

マクロ経済スライドによる調整が行われ、年金額の上昇については、調整率の分だけ抑制される。



賃金・物価の上昇率が小さい場合

賃金・物価の上昇率が小さく、マクロ経済スライドによる調整を適用すると年金額がマイナスになってしまう場合は、年金額の改定は行われない。



賃金・物価が下落した場合

賃金・物価が下落した場合、マクロ経済スライドによる調整は行われない。結果として、年金額は賃金・物価の下落分のみ引き下げられる。

